

差別のない明るい町を

外国人と人権

その2

中国と「日本人の目」

「誤解の糸を解きほぐす」



市人権推進課（教育庁舎1階）

TEL 32・2122

FAX 33・3525

本年の読売新聞8月30日号の「政（まつりごと）なび」欄に、標題のことが掲載されていたので、全文をご紹介します。

日本人作家としてただ一人、今回の見本市に臨んだ。

内容は、中国人に耳の痛い指摘も多い。例えば靖国神社問題。宿敵の墓を暴いて遺体にむち打つことすらあった中国では、日本の「死ねばみな仏になる」という考え方が理解できず、「軍国主義復活」で片づけようとする、といった具合だ。サイン待ちの大学生（21）は「日本語は出来ない。中国をよく知る人物の見方に興味があった」と話した。一般の中国人が、反日論調が目立つ中国メディアを通さず、日本人の考えを中国語で知る機会は限られている。

「外国人の目」を気にするのは、日本人だけではない。8月20日に閉幕した中国最大の見本市「上海ブックフェア」で、日本人の視点から中国人の発想や中国社会の特性を紹介した作者のサイン会に、100人以上が行列を作った。企業の中

国進出などを後押ししてきた篠原令氏（63）が出版した本の題名は「篠原令看中国」。日本の書店に「反中の本を並べても、状況は変わらない」と、3年前に出版した本を中国語に翻訳し、

その音楽家目当てで来たという人の一方で、サインの順番が来ると「中日友好」「中日不再戦」などと書き添えるよう求める人もいた。

相手の意見に耳を傾けなくなる「環境」作りが、誤解の糸を解きほぐすことにつながるような気がした。

（中国総局 五十嵐文）

昨年秋の中国での「反日行動」には、恐怖心と共に、忸怩（じくじ）たる思いをしたことでしょうかし、後ほどわかったことは、国内の不満を「反日無罪」に乗じてストレスの発散をしているらしいとのこと。

「人権草の根交流」を深め互いをよく知り、人権意識を高め、誤解の糸を解きほぐし、絆を再構築していきたいものです。

参考・引用文献

「読売新聞」
2013年8月30日(金)号

市民文芸 花みずき歌壇（292） 松並武夫・選

沈黙の我に問うかに木犀の匂い満ちくる窓辺に佇てば

中郷町 東野 典子

《評》障がい児教育に尽力し行動的だった作者も、年を重ね今は車椅子生活となり外出もままならない。しかしその生活の中から短歌を詠み俳句を作り、こころ豊かな生活を送っている。「沈黙の我に問うかに」で木犀がやさしく語りかけてくれるように香り、癒されて窓辺に佇んでいる作者の日常生活が見えてくるような作品である。

真つ白なキャンバスがまだ十枚は残りいるなり

描かねば死ねぬ

ひのめ総合療育センター 関 政明

恒例の宵宮かざる大花火夜汽車の中から出張の息子は

横須町 三宅 敏恵

台風も過ぎてゆきたり安堵して

庭木刈り込み冬を迎える

中田町 倉橋 正則

讃岐富士遙かに眺む高速道風に吹かるる

パラグライダー見ゆ

横須町 福島 夢栄

三日間続いたお祭り昼宮は

幼稚園児の可愛いワッショイ

坂野町 橋本千代乃

不便なる山の屋敷も津波時に役立つと思ひ先祖に感謝す

櫛渕町 松下 玉枝

名月がわが家を照らす午後八時

窓辺に立ちてしばし眺むる

横須町 柿本美知子

老いしわれマイナス志向さようなら

プラスへ向かい一歩踏み出す

神田瀬町 大西カヲル

下ばかり見て歩きしや香を放つ木犀今年は仰ぎ見ざりき

中田町 松並 敦子